

## *The Machine Stops* 一試論 －象徴的表現の意味とその効果について－

杉 本 久 美 子\*

A Study of *The Machine Stops*  
－ The Meanings and Effects of Symbolic Expressions －

Kumiko SUGIMOTO\*

Key words : *The Machine Stops*

different view of the world

reconciliation

symbolic expressions

『機械は止まる』

異なる世界観

和解

象徴的表現

### はじめに

E・M・フォースター (Edward Morgan Forster, 1879-1970) の短篇についての評価及び研究は、その作品数に比べると少ないのが現状である。問題の一つには、制作年と出版年にタイム・ラグがありすぎることが挙げられる。また別の問題としては、初期の1910年頃までの短篇には完成度の不十分さが、後期の1920年代以降のものには彼の同性愛の問題がストーリーに盛り込まれている点が挙げられる。ライオネル・トリリング (Trilling, Lionel) は初期の短篇12編のほとんどが神話的ファンタジーであるとし、そのうちの *The Road from Colonus* (1904) と *The Eternal Moment* (1905) の二つは例外かつ一番出来が良いと評価している。しかし、完成度に問題があるとしても初期の短篇の中にはForsterの執筆活動の変遷を辿る上で重要なものもあり、初期の短篇を考察することは、作家Forsterが形成されていく過程を知る良い手掛かりとなる。初期の短篇の中でも、*The Machine Stops* (1909) は従来殆んど研究されてこなかった。Forster自身この作品について「H・G・ウェルズの初期のユートピアに対する回答」“The Machine Stops is a reaction

to one of the earlier heavens of H. G. Wells.”(6) としている。Forsterは1910年に*Howards End* を出版し、1924年に*A Passage to India* を出版するまで、長編小説を出版していない。その間制作された短編小説 *The Machine Stops* は、第一部飛行船 (The Air-Ship)、第二部修理装置 (The Mending Apparatus)、第三部住居剥奪 (The Homeless) と三部構成になっている点や、ストーリーから窺える主要テーマ、また象徴的に用いられる表現に他の長編小説と共通する性質がある。*The Machine Stops* の主要登場人物はヴァシュティ (Vashti) と彼女の息子クーノ (Kuno) の二人だけであり、他に主な登場人物はいない。彼らが生きる世界は、蜜蜂の巣のような形をした六角形の部屋で、窓もなければ換気口も見当たらないが、常に新鮮な空気と楽器もないのに美しい旋律が流れるような部屋である。この部屋は全てが機械で管理されており、その中で人々は暮らしている。部屋の中のボタンを押せばほぼ全てのことを処理できるため、よほどのことがない限り、この部屋から出ることはない。人々は問題が生じたら部屋のシステム解説書を読み指示に従いさえすればいいという生活を、疑うことなく過ごしている。一見するとSF小説ともいえるこの短編では、固定観念に対するフォースターの懐疑心と個人的な人

\* 東北女子大学

間関係に重きを置く彼の精神を読み解くことができる。本論文では、研究対象とされてこなかった *The Machine Stops* において使用される表現の象徴性や本作品で効果的に用いられている音の描写について概観し、この作品の意義を考察したいと思う。

# 1. ヴァシュティ及び彼女が属する世界について

*The Machine Stops* は、地下に造られ、機械に管理された快適な空間で過ごしているヴァシュティのもとに、息子のクーノから連絡が来ることで話は始まる。この世界では、蜂の巣のような部屋に人が一人ずつ住んで（割り当てられて）おり、外部との連絡は全て機械を通して行われる。人々も直接会うこともなく、テレビ電話やテレビ会議で交流し合う。そして互いに新たな着想“idea”を得たかどうか聞き合うのを常としている。ヴァシュティは快適な自分の日常を乱されることに苛立ちを覚えやすい女性であり、相手が息子のクーノでも同様である。クーノが機械を通してではなく直接会って話したい、会いに来てほしいと懇願するも、快適な部屋を出て地上を旅することをためらう。彼女にとって部屋“room”を出て自然の中を旅することは、なんら着想“idea”を得るものではなく、まして直接会うということ自体にためらいを感じる。一方、クーノは機械社会に疑問を抱いており、飛行船での旅を好み、そして機械の世界の外に出て直接外気に触れ夜空の星を眺めることを切望している。そんなクーノはヴァシュティにとっては少し異常な存在であり、彼の精神は時代精神“the spirit of the age”に反するものだと彼女は思っている。ヴァシュティの心の拠り所は一冊の本「機械の書」“the Book of the Machine”と呼ばれるものである。この本は本来機械取り扱い説明書であったが、年々分厚くなり装丁も豪華になったものである。しかし、ヴァシュティにとってこの本は単なる解説書ではなく、心の拠り所となっている。“the Book”で始まる表現が暗示しているように、この本は彼女にとって聖書そのものである。本を敬い、口づけする彼女

の行為はもはや宗教行為であり、キリスト教徒やイスラム教徒が聖書や聖典を敬うのと同じ行為である。

Then, half ashamed, half joyful, she murmured ‘O Machine! O Machine!’ and raised the volume to her lips. Thrice she kissed it, thrice inclined her head, thrice she felt the delirium of acquiescence. (114) (下線筆者)

彼女にとって機械の書が聖書と同等なら、機械“the Machine”は彼女にとって神と同等である。機械の書に対する考えは、ヴァシュティのみならず他の人々も同様で、それは飛行船に向かって歩いていた人が、機械の書を落とした際の、周りの人々の動揺ぶりからも窺い知ることができる。

The man in front dropped his Book – no great matter, but it disquieted them all. In the rooms, if the Book was dropped, the floor raised it mechanically, but the gangway to the air-ship was not so prepared, and the sacred volume lay motionless. They stopped – the thing was unforeseen...they trooped on broad, Vashti treading on the pages as she did so. (118) (省略筆者)

この機械の書“the Book”はヴァシュティや他の住人たちが信奉する、いわば絶対的なものの象徴として描かれている。フォースターは、本を象徴的に描くことが多く、短篇 *Ansell* (1903) の中では、森番の主人公アンセルと対照的な人物、ケンブリッジの学生エドワード (Edward) が属する世界を象徴するものとして本が描かれ、知識や教養を暗示していた。機械の書に書かれている時代精神“the spirit of the age”に疑念を抱かず盲目的に信じている彼女は、社会の慣習に縛られた人間と判断してよいだろう。

さらに彼女が暮らす部屋“room”に着目するならば、長編 *A Room with a View* (1908) では、主人

公ルーシー・ハニチャーチ (Lucy Honeychurch) の婚約者セシル・ヴァイス (Cecil Vice) は、ヴァシュティと同様、知性と教養はあるが因習に囚われた人物として描かれている。ルーシーが弟や旅先で出会ったジョージ・エマソン (George Emerson) とテニスをしている際、彼一人だけがコートわきで読書をしている。本は自然と対照的に描かれ、セシルが重んじる知識や対面、慣習を表していた。またこの作品で用いられる眺め “View” という表現は、個人の自由な思想を表し、部屋 “room” は「個人」の象徴である。よって「眺めのある部屋」は自由な思想をもった個人を表し、逆に「眺めのない部屋」は伝統や慣習に囚われた状態を意味している。*The Machine Stops* では、ヴァシュティの住む部屋は、常時窓は閉ざされ、外光が遮断されている。人や物と直接的に接触することを嫌い、部屋の外に出たがらない彼女は、心身ともに機械に囚われている人物、つまり社会の因習に囚われた人物であり、常に新しい着想 “idea” を求めているにもかかわらず、いつも得られない “no ideas” ことから、彼女は自身の思想を持たない人物と見てよいだろう。

## 2. クーノ及び彼が属する世界について

ヴァシュティの息子クーノは、彼女とは正反対の人物として描きだされている。「機械は人間が作り出したもので、それ以上のものではない」 “Men made it, do not forget that. Great men, but men. The Machine is much, but it is not everything.” (110) と考えており、彼は彼女のように機械を信奉することはない。そして彼は機械社会の外に興味を抱き、機械が全てをコントロールしている世界から旧時代のトンネルと換気口を辿って外界へ出る。外界はもはや機械社会の住人たちが生き残れる世界ではなく、呼吸マスクを着用しないと生存できぬ世界である。クーノはヴァシュティに、自分がいかにして外界へのルートを見つけたのか、なぜ外界で生きられたのか、そして修繕機械によって見つかり捕まったこと、気付いたらいつもの部屋で人工的なものに囲まれている

たことを話す。彼の行為は、機械の世界では居住権剥奪 “Homelessness” の刑に相当する。これは外界で生きられない彼らにとって死刑と同じである。しかし、彼が生かされていたことに対し、ヴァシュティは「機械は慈悲深かったわね」 “The Machine has been most merciful.” (134) という。この「慈悲深い」という表現からも、彼女にとって機械が神と同一化していることがわかる。しかし、クーノは「(機械の慈悲ではなく) 神の慈悲を望む」 “I prefer the mercy of God.” (134) と言う。この表現から、クーノはヴァシュティと明らかに違っており、機械と神は別物であって、彼らが住む機械化された、人工的な世界に神は存在しないと考えている人物である。

クーノが外界への脱出を告白した後、二人は直接的に会うことはなくなったものの、彼はヴァシュティに「機械は止まるよ」「機械は止まりかけている」と伝える。 “The Machine stops.... The Machine is stopping.” (139) しかし、彼女は「息子だったけど、もう縁を切った男が、機械が止まりかけていると言っているのよ。気が狂っていないとしても、罰あたりだわ」 “A man who was my son believes that the Machine is stopping. It would be impious if it was not mud.” (139) と友人に述べ、クーノを信じようとはしない。彼女にとって機械が止まりかけているということは、神が死にかけているのに等しいことである。そしてこの時点で彼女にとってクーノはもはや息子ではない。彼女にとって、クーノの生身の言葉よりも、機械の書とその中に書かれた言葉の方が信頼に値するということから、クーノは機械と対照的な存在、生身の人間の象徴として捉える事ができる。

## 3. 機械及び二人の死が意味すること

クーノが外界に脱出を試みた後、機械社会では二つの変化が起こる。一つは、外界で使用する呼吸マスクの廃止である。呼吸マスクが使用できないということは、人間が外界に出られないことを意味し、人間の直接的経験を排除するものである。

機械を信奉している人たちは、直接的着想に気をつけろ“Beware of first hand ideas.” (135) と叫び、着想は間接的なものにしようと唱える。“Let your ideas be second-hand, and if possible tenth-hand.” (135) これは自発的行為を否定するものであり、自発的思考の停止をも意味する。

二つ目の変化は、宗教の復活である。しかしこの宗教とは機械を信仰するものであり、これに反発する者には、居住権剥奪、すなわち死という迫害が潜在している。これはクーノが指摘したように人間が道具として作り出した機械を信奉し、人間が盲目的に機械に従うこの状態は、言い換えるならば自由な思想の硬化と狂信状態である。

No one confessed the Machine was out of hand. Year by year it was served with increased efficiency and decreased intelligence. The better a man knew his own duties upon it, the less he understood the duties of his neighbor, and in all the world there was not one who understood the monster as a whole. Those master brains had perished. (138)

この変化の後、クーノの予見通り、機械の世界では様々な異常が発生する。まず音楽に雑音が入るようになり、ヴァシュティは苛立つ。彼女の友人は「自分も軋むような音で着想が乱される。その音が自分の中からか、壁からかわからない」という。“Sometimes my ideas are interrupted by a slight jarring noise.... I don't know whether it is inside my head or inside the wall.” (140) (下線筆者) また食べ物にはカビが生え、浴槽の水は悪臭を放ち始める。始めのうちは苦情を訴えるも、住人たちは次第に慣れ始める。しかし睡眠装置が故障し十分に眠れなくなると、誰かが機械を壊そうとしていると思い込むようになる。それも、修理装置委員会がまもなく直ると伝えたのを期に混乱は収束する。だがこの軋む音こそが、機械がとまる予兆であり、作品冒頭で“melodious sounds”と表現された音の変化である。機械社会の人間た

ちは、蜂の巣のような機械化された部屋の中で常にこの音と共に暮らしている。この音が鳴り続けることが機械社会にとって当然のことであり、空気と同様な存在である。存在しているが、強く意識しない限り存在を認識できないものである。しかしこの音は、機械社会やその世界の人間たちにとって心臓の鼓動と同じである。この音の異常は、心臓の異変であり、この音が止まることは死を意味している。機械社会をコントロールしている機械は、ますます不調になり、快適な睡眠や安楽死をもたらす装置はうまく作動せず、明るさは衰え、空気も淀み始める。そして機械が動かなくなった時、機械社会を襲った恐怖は「沈黙」である。

Then she broke down, for with the cessation of activity came an unexpected terror — silence.

She had never known silence, and the coming of it nearly killed her — it did kill many thousands of people outright. Ever since her birth she had been surrounded by the steady hum. It was to the ear what artificial air was to the lungs, and agonizing pains shot across her head. (143) (下線筆者)

この沈黙の瞬間が登場人物に啓示的に作用する展開は、Forster が *A Story of Panic* (1904) で用いた手法である。この短篇では登場人物たちが渓谷へピクニックに出かけた際、突然の静寂の後、言い知れぬ恐怖に襲われる。そのうちの一人、粗暴な少年ユースタスは人が変わったようになる。ホテルの部屋にいるのは嫌だと言い、夜中にホテルの庭で歌うようになる。彼はやがて部屋の中に拘束しようとする人々の手を逃れて森へと姿を消してしまう。彼の変貌は、ホテルの部屋に象徴される因習社会からの逸脱であると同時に、束縛からの解放をも意味している。

*The Machine Stops* で描かれる「沈黙」は、不変と思われるものの終わりと真理に至る瞬間の両方を意味している。フォースターの作品で用いられる音や音楽表現は、作品の展開を暗示するものと、



作品自体に一定のリズムを与えている場合とがある。この *The Machine Stops* の場合、機械音は機械社会そのものを象徴しており、ヴァシュティの友人やクーノが指摘したように、この世界で生きる人間の心身に入り込んでいる。

As I climbed, the rough edges cut through my gloves so that my hands bled. The light helped me for a little, and then came darkness and worse still, silence which pierced my ears like a sword. The Machine hums! Did you know that? Its hum penetrates our blood, and may even guide our thoughts. (127) (下線筆者)

そしてこの機械音が人間の鼓動と一体化したかのように存在し、やがて “melodious sounds” が “a slight jarring noise” になり、やがて “silence” へと変化する過程は、機械とそして機械がコントロールする社会やそこで生きる人間たちの破滅おも暗示している。そして機械の停止と共に多くの人々も「沈黙」の衝撃によって死亡する。しかし、クーノが外界に脱出を試み初めて「沈黙」を体験した際、苦痛だけでなく同時に啓示のようなものも受けている。

“This silence means that I am doing wrong.” But I heard voices in the silence, and again they strengthened me. (128)

彼は沈黙の中で聞いた声に導かれて外界に出る。これは “silence” が「死」だけを意味するのではなく、外界へと導くもの、機械の世界とは異なる観念の世界が存在するということをも表している。この二つの観念、二つの世界という二項対立は、フォースターが後に長編小説で取り上げた主要テーマ「社会的背景の異なるもの同士は互いに理解しあえるか」と同類のものである。*The Machine Stops* では、機械に盲目的に従う人々は機械の停止と共に死滅するという展開になっている。絶対的な世界やイデオロギーといったものに

対する Forster の懐疑的姿勢の表れであり、一元的な思想の危険性を示唆するものでもある。

機械の停止後、ヴァシュティとクーノは暗闇のなかで再開する。この時、彼女は「あの男」ではなく、「クーノ」と再び名前と呼ぶ。そしてクーノは母親に口づけする。二人が死ぬ間際に垣間見たものは、一点の汚れもない空 “the untainted sky” である。Forster は彼にとって最後の長編となった *A Passage to India* (1924) において、インドの大地を人生や現実社会の象徴として、そして隔たりのない大空を理想の世界の象徴として描いている。この「汚れのない空」は、クーノとヴァシュティの和解だけでなく、二人に象徴される二つの世界が和解した際の象徴として描き出されている。二人の死によって、異なる世界の和解がいかに困難であるか物語っている。しかし、この作品の結末が汚れのない空で締めくくられていることで、一縷の希望が示されているのである。

## 結 論

*The Machine Stops* は、従来フォースターの初期の短篇に分類され、従来の研究ではほとんど取りあげられてこなかった。しかし、作品の構成が長編小説と同様に三部構成になっていること、ヴァシュティとクーノに象徴される異なる思想や社会の軋轢と和解という内容は、フォースターが長編小説で扱う主要テーマ「社会的背景の異なる者同士は互いに理解しあえるか」と同じものである。初期の短篇とはいえ、作品が含む要素は長編と同等である。さらに、機械音の描写を巧みに変えることによって、機械社会の変化だけでなく機械社会に象徴される閉塞的な絶対主義を盲信することの危険性をも示唆している。フォースターの諸作品全体における音や音楽表現の使用法の傾向については今後の課題としたいと思う。

この論文の引用は E. M. Forster, *Collected Short Stories* (London: Penguin, 1947) によるものである。訳は藤村公輝訳『E・M・フォースター短篇選集』(近代文芸社、2000) を参照した。

## 参考文献

Trilling, Lionel. *E.M.Forster*, New York:

A New Directions, 1964.

小野寺健著『E・M・フォースターの姿勢』みすず書  
房、2001 年

加藤周一著『現代ヨーロッパの精神』岩波書店、  
1992 年

近藤いね子編『フォースター』研究社、1967 年